

自然エネルギー海洋深層水トンネルフォトン水で自然環境を昔ながらのサンゴの森に育て上げる方法例

2011 : 05 : 06

surroundingus supersonicwave laboratory Shuzo Arakaki

URL <https://syuzou.awk.jp/>

1 コマーシャルから



写真は500ccペットボトルトンネルフォトン水 Gm0100%商品です

世界で最も深い海の底1400メートルから取水した深層水と600メートル深の中層水と国立公園の沖縄国頭村奥の森の水の3種水を絶妙に調合した世界に類を見ない深層水調合液です

一般の方への販売は現在ネット検索では見られませんので、業務用として流通していると思われます。なぜこれを無理して一般に流通させようとしているか？それを理解いただくための今回のプレゼンとなります。読む形式より見て感じる表現で進めていきます。

作戦開始



1000倍希釈業務用 Gmo 2ℓ我が家はこれを2カ月で使い切ります

日付に嘘がないように携帯を置きました

ダイソーで16個入り105円のたれ瓶



Gmo を充填して工芸用アルミ線で細工

ニューリリース500ミリトンネルフ
ォトン水

サンゴのかけらをたれ瓶の重りに使用



昨年7月にセットしたたれ瓶
サンゴが付着し石になって見られました



石になったたれ瓶
サンゴは元気よく根付いています

今回追加したたれ瓶



ニューリリースの500ミリモデル
さん

今回追加セットしたたれ瓶
セットしたらキャップを外すこと
をお忘れなく



水に入るのが難儀だったのでサンゴ
の鍾付きを投げ込みました



水に入るのが難儀だったのでサンゴ
の鍾付きを投げ込みました



先月事前調査した時の壊滅状態区域の
境界水路



ハマサンゴが一つだけ見られました



近くに枝サンゴの小さいものがかろう
じて生息していたのでたれ瓶セットし
パワーを補う



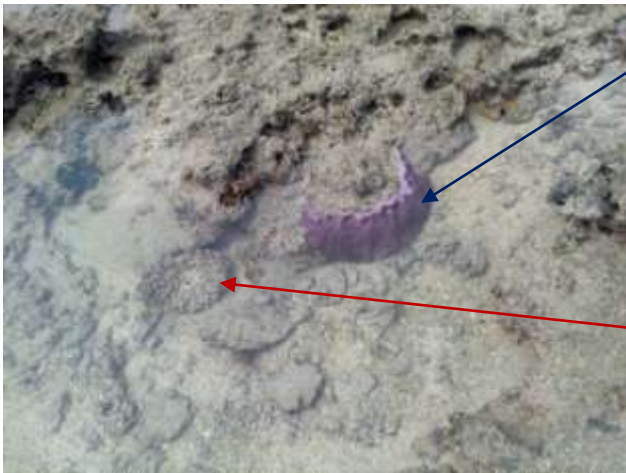
水路両脇は赤土被害でアオサも生えて
いない

地上の環境破壊がストップするまで回
復見込めない

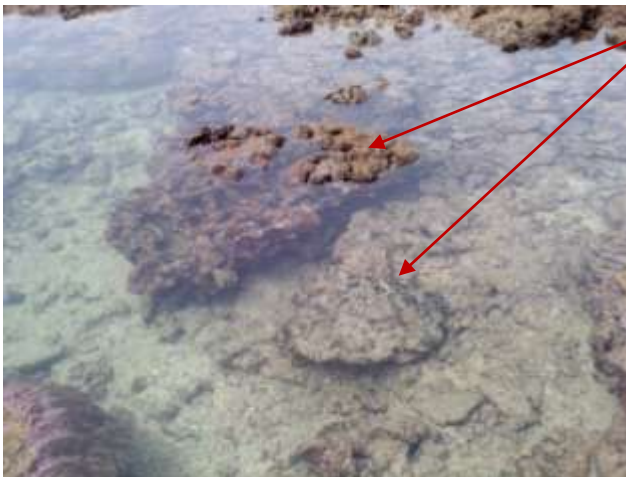
サンゴが生息していた跡：砂漠化



ここが水路



水路に1つだけハマサンゴの種類が見られた:



化石化してしまったサンゴ
サンゴ虫は移動性があると思うので
空き家が住める環境に戻ったら
再生すると思います

イソギンチャクです



イソギンチャクだらけ

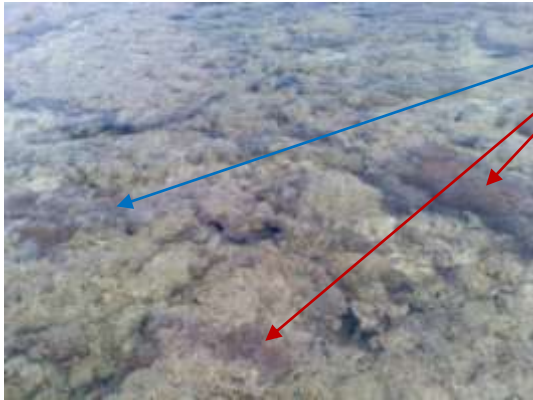


多彩なイソギンチャク群

ウンバチイソギンチャク？猛毒で危険です



かろうじて生き延びていた脳サンゴ



イソギンチャクです



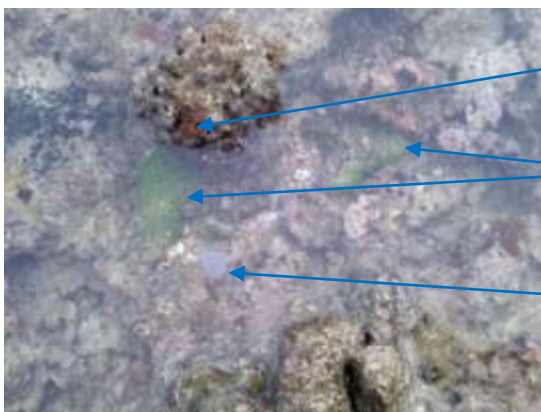
小さな水たまりに細々と暮らす
脳サンゴとシャコ貝（姫シャコ）

パワーセットしました

白骨化している脳サンゴ、鬼ヒト
デ被害に類似する



イソギンチャク



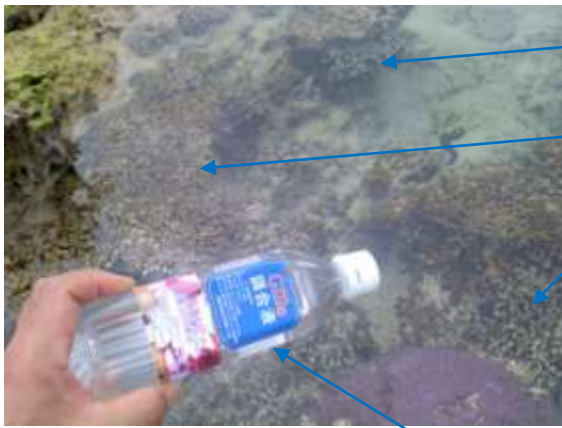
褐色藻

緑色の脳サンゴ：産卵後に多い色
合いに変化

パワーセット



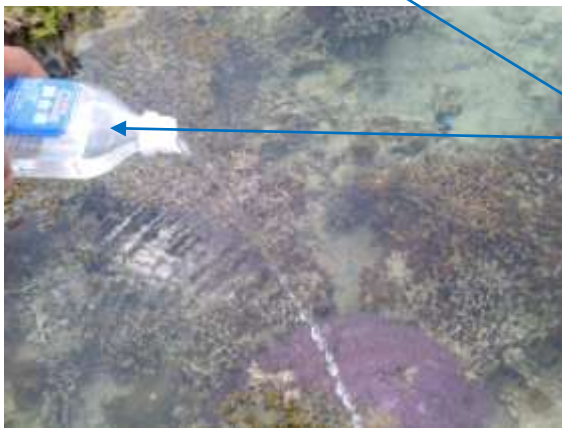
10メートル港川に戻るとサンゴは息づいている：赤土被害がない＝海流循環が異なる



サンゴ

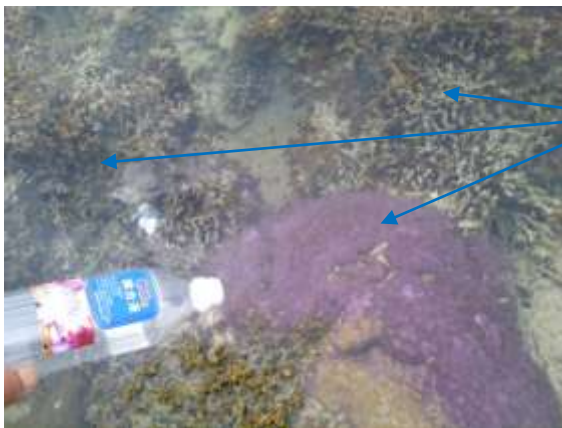
サンゴ

サンゴ

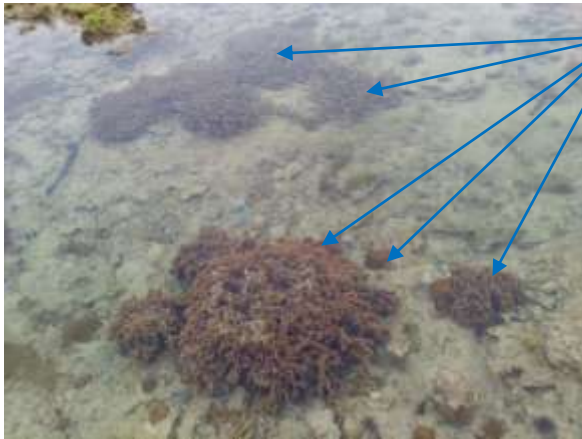


モデルさんデビュー

60dBトンネルフォトン水 (Gm0)



壊滅的な水路周囲に繁殖域を拡大してくれるよう500すべてパワーセット



これらにエネルギーを与えて進出していただく



梅雨入りして8日目ぐらい、糸数城址に霧がかかっている

駐車場はこの先で300メートルぐらいこの岩場を歩かないと

平成23年7月15日追跡調査写真集：生命サイクルの復活で水は美しい輝きを放っていました



















台風の影響 台風は10トンブロックを簡単に押し流す





藻類の繁殖時期はサンゴは藻類に場所を提供し、藻類は旧暦の3月3日の大潮での干上がりによる乾燥被害からサンゴを守る







弱電流でサンゴ復活、観光業や漁業も活性化

- 2011年12月26日 19:19 発信地:ペムテラン/インドネシア



- [ブログ](#)

-
-
-
-

インドネシア・バリ (Bali) 島沖のペムテラン (Pemuteran) 湾に設置された金属の枠にすみつくサンゴとその周りを泳ぐ魚の群れ (2011年11月23日撮影)。

(c)AFP/RANI E. MORROW-WUIGK

- [関連写真 1/1](#) ページ全 3 枚



-





○

【12月26日 AFP】海水温上昇やシアン化物を使った漁法で破壊されたインドネシア・バリ（[Bali](#)）島周辺のサンゴが、ドイツ科学者の開発した装置を活用したダイバーの取り組みで生き返り、そのプロジェクトが世界中に広がりつつある。

ドイツ生まれのオーストラリア人女性ダイバー、ラニ・モロー・ウィックさん（60）がその美しいサンゴ礁にひかれ、初めてバリ島北部ペムテラン（[Pemuteran](#)）の海に潜ったのは1992年のこと。しかし、すでにシアン化物やダイナマイトを使った漁法でひどく傷ついていたサンゴ礁は、90年代終わりまでには海水温上昇で絶滅の危機にひんするようになった。

そうしたとき、ラニさんはドイツの建築家で海洋学者のボルフ・ヒルベルツ（[Wolf Hilbertz](#)）氏が1970年代に開発した「バイオロック（[Biorock](#)）」と呼ばれる技術について知り、耳をそばだてた。

外見から通称「カニ」と呼ばれるこの装置は、金属製の枠の装置を海に沈めて生物に害のない弱い電流を流し、枠を「成長」させるもの。ヒルベルツ氏が米レイジアナ（[Louisiana](#)）州で装置をテストしたところ、電解反応で石灰岩が形成され、数か月でカキが装置を覆い、石灰岩にすみつくようになった。さらにテストを重ねた結果、サンゴでも同じ現象が確認された。

ラニ氏はこの装置を見たとき、「自分の海」を救うアイデアを思いついた。そして2000年に私財を投じ、ペムテラン湾に面するリゾート地、タマンサリ（[Taman Sari](#)）の協力を得て、プロジェクトを開始。装置を22基設置することを決めた。

今ではペムテラン湾の約2ヘクタールの範囲に約60の枠が設置されている。サンゴ礁は絶滅の危機から救われただけでなく、以前よりも豊かになっている。「バイオロック」によってサンゴを生き返っただけでなく、白化や地球温暖化にも強くなった。

1980年代半ばからヒルベルツ氏とともに働き、4年前に同氏が亡くなった後も研究を続けているジャマイカの海洋生物学者で生物地球化学者の[Thomas J. Goreau](#)氏はAFPの取材に、「サンゴは2〜6倍のスピードで成長している。数年でサンゴ礁を回復できるだろう」と話している。

サンゴの復活で、観光客も増えた。ラニ氏によると、2000年時点からダイビングショップの数は倍増したという。当初、プロジェクトが生活を脅かすのではないかと難色を示していた地元の漁業関係者らも、今ではプロジェクトの利点を認めているという。

「バイオロック」技術は現在、東南アジアの他、カリブ海、インド洋、太平洋地域などの20か国で採用されている。